

新潟県におけるてんかん診療連携—西新潟中央病院—（2019年度）

国立病院機構西新潟中央病院副院長 遠山 潤

国立病院機構西新潟中央病院神経部長 福多真史

まとめ

- 西新潟中央病院の診療実績は例年通りであり、開業医、神経専門医、非神経専門医との診療連携の構築が進んでいる。
- 新潟大学とは、てんかん外科の術前評価や実際の手術において連携が強化されている。
- 広域な新潟県内でのてんかん診療ネットワークを構築するために、行政との関わりを深めて各地域での啓発活動を行っていく。

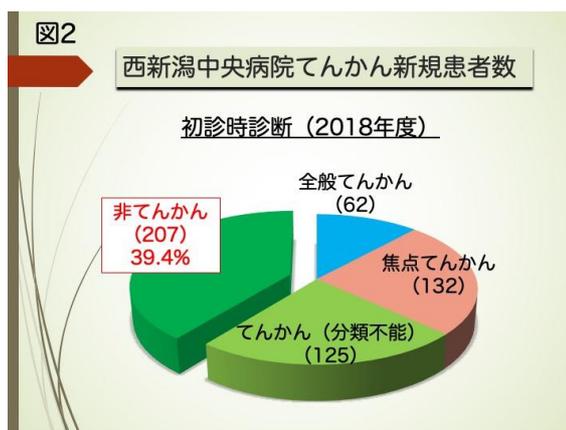
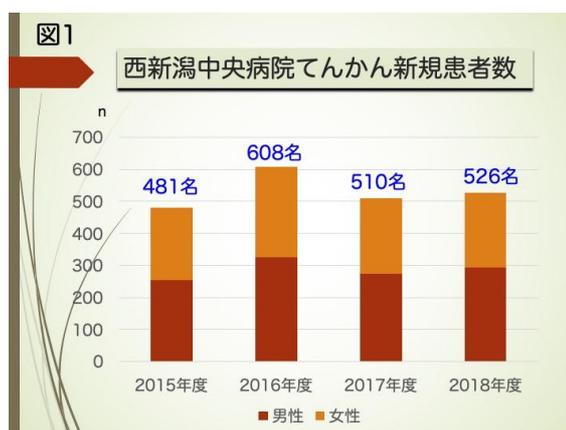
1. 診療実績

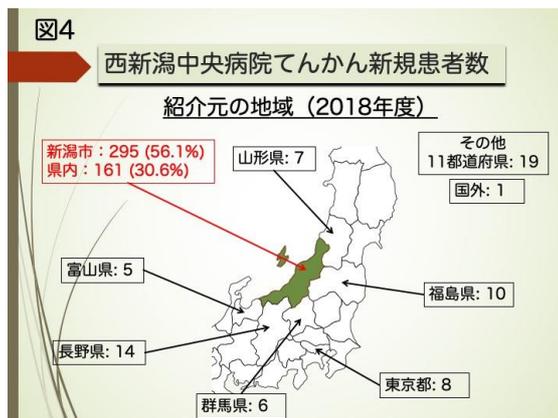
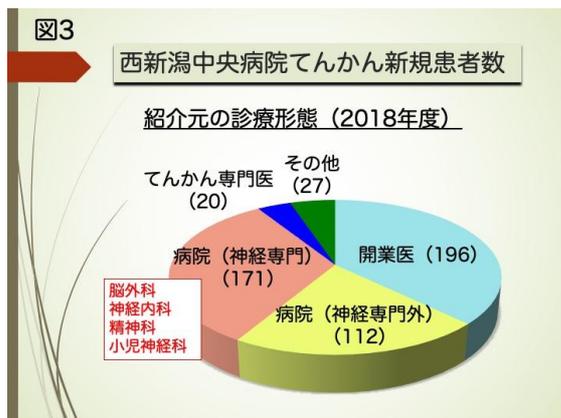
現在当院のてんかんセンターは、2019年度4月から小児神経科医6名（てんかん専門医2名）、精神科医1名（てんかん専門医）、脳神経外科医5名（てんかん専門医4名）の12名で診療を行っている。てんかんの診療機器としては、1.5テスラMRI、SPECT、MEG、ビデオ脳波記録5台などで、例年と変わりはない。

2015年度からのてんかんの新規患者数については、2015年度が481名、2016年度が608名、2017年度が510名、2018年度が526名と、年間約500名から600名で推移していて、月に換算すると、約40名から50名の新規患者が当院を受診していることになる（図1）。

初診時の診断では、2018年度は非てんかん症例が207名（39.4%）と1/3強を占めていて、難治性てんかんばかりではなく、診断に困った症例、鑑別診断のための症例なども多く受診している（図2）。

紹介元の診療形態は開業医、また病院の中で脳外科、脳神経内科、精神科、小児神経科などの神経専門医からの紹介、神経専門医以外の医師からの紹介の3つのパターンがほぼ同じ割合で、この傾向も例年と変わりなかった（図3）。





紹介元の地域は新潟市が295名(56.1%)、新潟県全体では456名(86.7%)で、隣県から5名から14名、その他の11都道府県から19名が新規患者として受診していた(図4)。

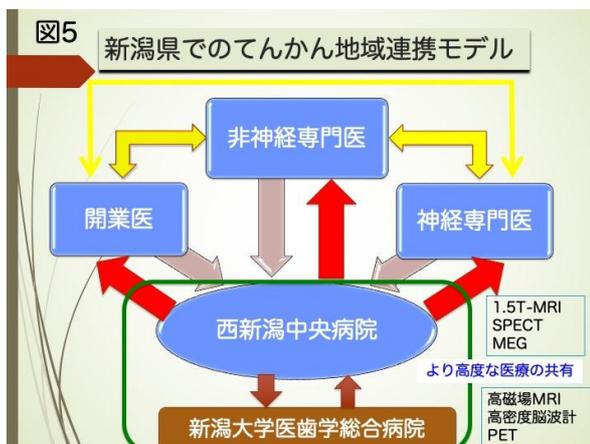
2018年1月から12月までの当院での手術件数は123件で、視床下部過誤腫に対する定位温熱凝固術が18件、側頭葉切除術が3件、迷走神経刺激装置留置術が10件、頭蓋内電極留置術が9件、焦点切除術が6件、脳梁離断術が1件で、その他迷走神経刺激装置交換術などを合計すると、てんかん外科として52件の手術を行っていた。

2. 教育・啓発活動

2018年度の教育、啓発活動は、例年通り、臨床検査技師向けの研修会、保健師向けの研修会、学校教師、福祉課職員向けの研修会、医師向けのセミナー、看護師のための研修会が行われた。市民向けの講演会は2018年10月と2019年3月に開催され、とくに3月の講演会は新潟県障害福祉課と共催で行い、積極的に関わってもらい、142名という多数の参加者だった。今後も行政との関わりを重要視して啓発活動に取り組む予定である。

3. 大学との診療連携

2015年10月から新潟大学脳神経外科との診療連携がはじまり(図5)、2018年12月までに24例で連携を行った。このうち18例は術前検査として高磁場MRI(3テスラ、あるいは研究用の7テスラ)、高密度脳波計検査、FDG-PET検査などを大学に依頼して、12例は当院ですでにてんかん外科手術を行った。また当院で術前検査を行い、大学で手術を施行した症例が5例であった。てんかんの術前検査を行うにあたって、大学と連携することは、患者により高度な医療を供給できるということでは有意義であり、今後も積極的に連携を強めていく予定である。



4. 今後の課題

新潟県自体が広域であるため、県内の各地域の病院との連携が重要である。新発田市、長岡市、魚沼市、上越市などには総合病院があるので、将来的には新潟県内のてんかん診療ネットワークという形で、各病院にてんかん診療の窓口などが開設されることが望ましい。そのためには、患者の紹介、逆紹介だけでなく、医療関係者、一般市民向けのてんかんの啓発活動を広く行う必要があると思われる。2019年度は新潟市以外での講演会を予定しており、さらなる啓発活動に力を入れていく予定である。